911.3
八

芭蕉翁一代集

袖珍抄

前後十三冊

俳諧袖珍鈔附言

余嘗て近世畸人傳を讀む大和國
葛下郡竹内村に寡婦あり
伊麻といふ年六十に餘りぬべくなほ
老たる父に仕へて孝篤し
芭蕉庵桃青翁貞享五年四月
に大和路行脚のついでにそれ
家を訪て感涙とゞめかね
しとやのことく京に來わらく
書家雲竹に語る雲竹みづから
大和に往てこの婦をみて其
せるを門人為に代わりて其
姿を寫来りて贊を載する文浪
某のよしの花行もうつしを記し
桃青翁伊麻の家にして摘みし
うのくこの往来の料物のことわり
なくそへ花よりもめ物しもき子かん
ふるうけれはまと引返し帰れぬ

此翁又まさゆゑある者の子なら
ましかばんやと云へり此頃
袖珍抄刻既成り書肆　青霞堂
のあるじ携来りて余に一言を需む
余是を見るに消息の旅翁芳野
行脚の路費とも未に備への事とあり
られて伊麻にあるもの貌二方金に
過て豈これを貴誉せる人全く多
寡あらんや唯その志は高潔のミ
今や翁一代の文ミ手遺語を備す
庶幾くハ此抄を懐にする者
俳士翁の志を志としつく
唯花月席上の玩具とのみ
なさ事なかれと毋言を

嘉永五年春三月十五日
洛西野夫飄齋
新綿陳人行納書

俳諧袖珍抄句評之部

古経舎默池輯

小なる清水にある竹の枝ゑらしくまつき小窓にすへりになるさやまとと紫の心とくせあるを種とし〳〵花を捨して句ともを作つ見右とたまるからて清るゑしてさるかしめそかくそれゑらつくのみしかき葉れ志んきそ〳〵して清濁高下を記して三十条の発句を合せをかひて力わ我の武池はもまた入れと我まく筆中にはを出ちしくされせまに枝やなせんとすれは是を貫おけはさうゆめる人合せて猪屑を書くあのなれは又弥生の發句を書き袖に盈ぬる人あまに随ひしく弥心と又いふうとしも更までそうさ手私の俳をてらして見てやんる所を作るきて当所なまらの我をん弥のそやしろのあるけくなとなりぬ

此翁又まよはせる孝の子なら
ずまつらんやと云つゝ此頃
袖珍抄刻既成り書肆青雲堂
のあるし携来りて余に一言を需む
余是を見るに消息の翁芳野
行脚の路費と云来に備ふの志あ
られて伊麻にあるもの幾二万金に
過ぬ豈これを更誉ある人金は多
寡をえらんや唯その志は高潔のミ
今や翁一代の文章遺語令備す
庶幾くは此抄を懐にする者は
俳士翁の志を志とし
く唯花月席上の玩具とのみ
見る事なからん事を爰に云

嘉永五年春三月十五日
洛西野夫飄齋
新錦繍人行納書

俳諧袖珍抄句評之部

古紙舎黙池輯

小島にかゝる竹の枝ふりくるき
小亭にすゞり阿るをやつきと
紫のひとくせあるを糸とつく
其の様しき句とも其阿つみ右
と在にまろて清静ふしまさる
かしめてかくこれらつくるのみ
しかき葉は志んきそふし清濁
高下を記して三十葉は発句合せ
を呼ひ太刀わ我の武非はもなくれ
と我まつ筆中にて此出ちくしくれ
其は披露せんとすは阿る浅点貝
おけひとつか心合せて勝負を分
其のなれハ又非常は発句を其
軸に並ぬるに家に極りてく非心と
見いふくとも甲乙ろさ手紙の
様をてらしてぬるをさを阿れき
て家前はまるつ新しん非のさやし
ろのなめけくさとたすぬ

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏
宗房釣月軒にしてみつから序す

貝おほひ　三十番俳諧句合

松尾氏宗房撰

一番

左　勝

丹前ひろき色や紬羅ふうさし紬　三木

右

妻の影やふとく出すうさひ紬　義正

左の句ハ白ひもさうき紬ふしの
うきんけよりも多くつめて覚侍る
右も又妻の影ハ姫とく大きなと
云ふりやそさよ大音のほとも無く
れ侍れとも一番二番ともこハ程
白ひねる事に心ときめき侍りて
例の左を為勝

二番

左　勝

紅梅のつほミやあかいこんふくろ　[illegible]

右

兄分に梅をこのむや児さくら　肔旦

左の赤いこんふくろハ大坂よりも好ろ丸

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏
宗房釣月軒にしてみづから序す

貝おほひ　三十番発句合

松尾氏宗房撰

一番

左勝　　　　三木

丹前ひやる色や紗羅ふりさひ紬

右　　　　義正

妻の前やふとく出すまふ紬

左の句ハ白ひもゑらき紗羅ふしの
うとんげよりもめづらしく覚侍る
右も又妻のおハぬめとく大きなると
云ぶりやそゞよ大音のほとも妻る
れ侍れとも一番二ッよりも以八精
白ひける妻に心ときめき侍りて
例左を為勝

二番

左　勝

の花笠とうたふにや及ばれはなるべし

し　右猫を見分るのむ也猫ハ

むさのあしき家さへそ何れとも

すの色そハ猫の発句と此花猫

の発句と此の句ぞ今そ何れにも

も昔と成をすきさのひら尋ねやとう

くちのこん絵ハ趣向もよきさまに

絵とみてされハ右の句ぞおくれき

波沽ハ先ン思ひとすりて左の勝

三番

左　　　　　　　　　　　　素邦

なく声やけふ御殿のはし白き

右　勝　　　　　　　　　　武也

藪よりすむ蛍もてや出作ふし

左御殿の橋をかきてみのとはるを白ひ

あまれたしよ見おされたるにけるらく

さえつゝまさるにてかれとも右の

趣向ハ藪よりすむといふより家

の夜のも涼くいふも花て蛍も百

姓の洄茶のくてけるれもれく上也

ひとはとるやや作らん

四番

左　　　　　　　　　　　　竹番

きのる猫ハ年の毒なんときて出

右　勝　　　　　　　　　　和正

素意の我おもひや猫のらくさけ

猫よやさくひを見つけしまする左の句

時らしきうへを身ましくるハ一段

此句ろをもうへハ我もまきのなくと

云ても気さのうらいぬの身をなれ一勝

これのそきのくれに作る

右すこ猫のらくあんと云ふ者をつけ

急に元合これてるに作りや者んは

やうりや気柏木の又而人ねうくと

あるし事我りても又浮氏の書を本

丁の書れうけよ見ても物まも猫乃引

浮の思ひ様りけましと右の句さける

難もたけま只右勝

五番

左　特

はなる代菜や雪のみる雪乃の部　貞好

右

消残る雪乃や縁側しなんさ　一友

右の句雪乃を雪のみとしつめとさら
きしとらへ絶世に依りてさこそを
さ縁とらるふハ高き所を入し右山の付
たへ門出されてるはなるふんとつけ　排香
提方を覚ゆる
右の句雪をまろのしよてや雪なく
草庵のうしもたよろしく見り
ら尺の最おのゝとた人作れともる一旦
とんさる他者を其のしくもさ雪ま
まてしかもなきりゆるれ持ささ
めぬ

六番

左　勝

きやんゆけのまよはや今し桜　正之

右

見すゆんとつて山路のやまさくら　之見

左の句他作の鼻を白へとも一句もやさしく
まさりてむくしとむく大尾なくか
き他者のよ宮の句さのとと楽のて
みもとはとつて山本の々よ古狸とさく
ふ不ずなれハ後世抱の大抵よ狸ハ
皆ふせて称侍ん

七番

左　勝

たぐりよせんから糸引く一人と桜　笑尾

右

春風よかれそふや紙で風桜　竹斎

右の句ハ長吉郎かしと笑ひよくも
あるへらさて此者のまれとも笑くめる
か事ゆきれハなかりし
右まことむかしの江戸名よかれとをいか
春風よかれとそ他りさる紙しハ花を
惜むんもくおまを掛りて勝と定侍

八番

左　勝

うくひすや晩鐘さがし北書の花　柳亡

右

雅ありへやとてわけゆかむもとみけ　枝雪子
たく出るのそのの音をも思ひ出しれ吹落ち
の花の他念けるとかひなき納まり
左の句花の詩をせすせらる定なしといて
以说てかくうて分せ候らん雅を出かと
むすぶの心も修してゆかなくて淡薄十
年一寸もやさこのひぬ花の枝咲そその
ほいをおたれいは先月の雲の晩鐘さのけ
ふの空にきそむすとれ仍左を勝

九番

左　勝

梅てきる音やちらなし花の枝　各節

右

きそも尺に甚べく羽おまたや　宗眉

たむの枝をちょあくと様見る能大
様に池能の歌くともいままはしきを
右の甚べく羽おいきそ尺く合おや
とふんあれと一句は仕立もうろく添出
すまと楽の色もゆるしらんやと
思召のなづくとも申すすを上右の梅

のまもし侍らすあれは大人のかへさも
やあくてやけまし勝うき

十番

左　持

俳さけ背んに女の手かなる　路廷

右

ゆりきや山花尾ちにあまやるの　和人

左いは尾中待の岳花の煙にさのひきる
句の深いは子規のよりありもとかく六徳花
なのありいやかさされおっての耘ま
すんと花れ宰あれとももたよひり
ひけらんの先とうとふにあおれい
お花の毒やくも指かくてやまの
からみけをえさてあわしぬいころ
きられきお花あり

十一番

左　勝

時有苦しう峰かしさん恵菜　壹之

右

英あみ子どやしあきの子規　一志

たゝきやうれしきれしとおもひてそくと也
の句の作れ初もえぬるように拾やさ
左の句古今ともかひとつの中に五十首と云之
ともふくて前のふしと仰し世そ騒若よ
又すれハ西行がやとおもひやるよの亦お
とのうかへし返り侍る伊勢の古き申す
に出れハ右の句といふそんに勝かまへ
られと左の句にかしこくもとしちかす
ことうしさしひ出されて大坂なれしれ
ひき持ちき

十二番

左　勝

小六寸の木さしや菖蒲うれ身　義子

右

菖蒲刀中や桂の木にかけゝり　雲水

これさ文作ハ小六寸とはかみだす
るでつちハするしんでハかるべい
かるぞ
右の刀ハ源に来ちかひの太刀元
のさやハ三文下値ハ一文せめて五文の

おうしきらひのやさまのとえ人侍る
左の六寸ハ五寸ば香を菖蒲刀
みぎきおなみの木にて作れハ桂の木の
切り割りき刀寸中も及へうれ

十三番

左

故郷り火ようれも未黄な姫れ　遠去

右　勝

ふまくられさまん持秋の般若ね　義正

左の句未黄なるむすめとへふまくれ
たまと云を殊しるてふまえ一句の
立すいくも志中しく山家のよの
ともえてねと
右の句ねせんなと云ふし世に難
まてうりされてうそかやの木とされ
めひしれて日手上木竹の花す
めよふまくられてそれもむつひたつ
らうんもむけのうれハたゝ右の
身秋のゆふりなすうりやんそ

十四番

左　持

かゝやれ小箱わきの流との弦　勝之

右

扇子やおゝ風を吹て来さ　甘入

左ハかの猿三郎が織るをとめし派き
ぬのいとを綰らしき拍拍さ
右の句扇をゆる吹てきるゝとと云小君
扇よひいとけられてれいはすかうかゝといふ
かゝとゝろつかやとれさの方へかゝとゝろ
ひとつと持とけを定めかるめしハ撲陸
のよをそそかさぬ扇のかなあもむくの
紫木賊のみかき骨ともにて入られハ
扇角力ハかちまけぬく持にあさ
めし侍る

十五番

左　持

すゝれてハ月やひとハおりたれ　貝好

右

東炊さをやはハ青ハ月のかけ　藤嵐子

左ハよろひとこふを侍るふとりなき

きこゝハすゝれのはみ月をおとろし
侍りけりてれけしろハ
右もすゝひ盆ひ踊の拍子とたてゝ
やなひさりて長刀をぬきんてゝる似
君ハきやけのきかてる紀侍るすよ
紀持く定めかおせとり

十六番

左　勝

月の舟やしと雲へどこゝかと浮かや　位晦

右

月光やゞ盆よひしかんど出つ入つ　三竿

左の句もあり傳の画見楽盆むしゃ
常のおとすりありハ浄法の字
うくりひあり月の光をてらありと
光明遍照十方世界のまん中と
いはゞ渡句をやゝ少へき
右もてゝよひしかんとゝとをとなう
ちゝとゝ似あれとうゝゝ旅すゝや句
維持持し侍りしてるゝ紀候ゐ
を然と地こく論ハ小異ならぬそ

雑炭のおそろしを恐るゝ気の毒ろう
かりにも思のさゝをきつひてゆく
さけなるつし涙を拭ひくさく鑑
つくり拙劣しく以左為勝

十七番

左

ちよおと恐さるのやあれも納返　吉之

右　勝

むかふ鉤の足をとぬるやひんとひん　雪那

左侍者のかゐは持ちくてうと茶さ
少おかれは両れも緊さるのらはてようう
あるべし
右ひんとひんと先き廻るはゆるとそり
ゆふそとえて侍れども今いひつる
中まゆひほとりやすてたのちるふ言ひ
付侍るたのされも繁さうるる墨
ちとかんよみとのうち筆のめとらら
ま侍れいふさら作絶のゆうしたと
さいよく引てのされくすし

十八番

左　勝

はれ上り天たえよ出よ稲の米　適意

右

かゞける稲穂拍ずを京女郎　城次

左の句大西えと云を稲の米よゆひ
すぎされしますあさこれるをかり
集めて種の名なくぬる句作りまれ
さらの是べきゆうもの
又右の京女郎よみのだいなあれも
すきくゐの趣して心むるゐあれと
稲のものを拵られい我書あつぬ
はすわりと出んぞ意へさしおいて
田のひつちえいおもすゝせわり
を勝とさため

十九番

左　持

されまもむせてんの武蔵　萬子

右

温(ウン)のめと掃てめのゆる新海が　哉也

左右の新海味ひいつれとときん

てらるゝ花鼻息もむせてらんのむ
新酒ハかうはしくして殊にほさけ
のさりたる句作りぞ
右の句混のめと云てはせ下にて
ほくろめかゆゑとてくるしからず
風体のよきハいさゝかまて実なれ
さましぬ男あれハ鼻毛を
かうもうれしくてやさしの勝すけ
さもえさこめ侍らぬハ作者も
ほいなかるべきや

二十番

左 勝

鼻毛をもうれなや小町か手鉄炮　政舜

右

女丈夫や毛ぬ毛を抜てそ鼻毛也　宗義

左の発句小町と云より案せられ
きを出つゝね侍りしよりむすく
とり合されたるなるべし　右ハ上お
のゝてつかうと云を見えるされさ
る鉄炮のすぢはかしらくおもひされ

たる鉄のいとまも見えざれハ火縄のひ
ぐんをおへきゆうなれし
右の女丈夫鼻毛しく掃をせんも毛
ぬかりきれハ何か好き筒出んほし
えやいまの先の手侍りぬ

二十一番

左

佐男花の嵩の名ばかし萩の葉　鼻毛

右 勝

みち萩や都の花と云所の花　石口

左萩と藤の花と云をおりくらぬ
ひなされ侍れども萩の葉を付出
と云ひと出来を能考て心のほくを
ほのぼのて見るより是非なう一句
もすりやと云のひてあれ合う右
の発句にてえたるにもまさつき大
いかゝなるやすさん

二十二番

左 勝

見やけれか右のうらの紅葉　三木

右　　　　　　　　　　　　　　　　　　故呈
もみぢぬと見てかんざし此枝の露
たの白紅葉のきめかの化さこと
出のかよくえひけら是紅葉とものみなね
おしと好かしへ見風ある抱げさせ
なけしぬくあるくたの紅くふ紅
も此赤くあるへいふそる恋なすき
ものくら紫のやうに大むらさきとを
泥万里のたくひ何れへのくるめてなき
打蔵を来てみきのし此本力外ら
一かりとけてのかれ人

二十三番

左　勝　　　　　　　　　　　　　　　餘淋
しぐれやとぬれけ是しぐれ小河の

右　　　　　　　　　　　　　　　　　故翁
しぐるかとやさそきやとし霧の空
たのぬれかけ是恋ハ何のとりあ
此恋れりの袖よしぐれの通り
りのとやしさん
出の白さうきやりとしふんしぐれ

さよしうたハ何のれたあかしや恋
いさそとハ是落けし此れと申さ紅
よるかうちやかれ志くれハ出ある
あくし此所よしぐれとぬれかけき
者を份のかちとや定めん

二十四番

左　持　　　　　　　　　　　　　　　餘淋
海の越すなきまちぬき子花呈

右　　　　　　　　　　　　　　　　　三等
かうら白の代のちんぐう足さ露
左の海の越年とた一至ろとてうと天
文て足すくへよろしと弱く仍ねた
一句たしかよ見恋くれてよたあぬ
よう男へ上け恐きも又へおすろく
待るよ右此ちんとう足こ来しよき
あうきかう白ハ天の原を定そう
冬す非等の秋莉すちの数居に
もすくれて骨くみ給さく足花露骨
もたくまし是れハ他天のちよあろも
勝さくへよくなるさも子なる此也

きゝなれしあけ残ハあね
二十五番
左
あらそひたすしぬ丸みなれ　卑毛
右　勝
尺八を移し流え来なしやとおかしめせ　一入
左の方前もころ名もしぬとやされ
しいらられの方る向もも尺てはなれ
もおかしかくて多申しぬよ公ハ宅来
名しやと云ふ事を手られ海へ
似しきさる六楯の歴史源くいひ云
ら残将のかくらもあるへきるなれ
せん鍋のかさめともて尺ハかちのき
ときこめぬされと和老もひとつ
るて耳鑿し聞もちろくまのみ
その将海のここみ遠ひもゆりやせん
方へはをはむるともさのそ沁分体
付さ子れ
二十六番
左　お

うきふ島ハかんしめける浦之那　勝云
右
そこてさせ路の恋さの月のけ　球渋
左の方ころのけしハかんらしぬくふ
と云ふ寿をとらいくど河まこ
られされハ路のそら帰ふそ月後せ
移らるもとるうまかるへし
宮文居公踊のそこてさせと云ふ古お
まくだけハされさるげにかく宮
月光のひらなる似とも上ありハ
持すみのりハあをさこめんさお
ろらずるざ人のおもひつかく流き剣
よ流むとくら寸まおまんで
とりておときさあ世の人のそし
書を乃ふよりしてのちろされ中ぬる
まんるいをさんぬるこれ
二十七番
左
越後布られの縁さんの雪ふき　呉之
右　持

降けむる雨やしげ子が山　義正
とらのまをば後は師にみえこれける
左の句はけやまきこの志ら
そはさやうのよりもすくなくたる
にやうそれぬ俳名あれとも私
のもんとこうの小吾のやゝい旅
うて一句のをよくして能見て候これ
出は志て意ことを中ゝ中かれお
されひとも中ふとも先それきまた不二に
入はうそら扇をちて見候へんとた
の後は宗匠を宴してそうみけさせ
よいさせられなまずうとやや
候へん

二十八番

左　持

炭の若ひ付てうつしいさんぶる　嘉猪　左勝

右

炭うるふるやずんと荒れ来や　右勝

右炭をうると云けしまする
けふうすいとんさるの様き

ひとめく一句もよく見きこみのけおき
れぬ俳名を
云の句すんとやゝあきと入ほれと評
のとくたんと見けゝまされべ又
けし炭とみさんとものほく持
須少世据をやく炭かすのはくろ
まても持うくて持と定候き

二十九番

左　勝

掃除して熟望西蒼や炭俵　不屈

右

炭俵やおのか光秘によく声さ　一入

左炭うる者さんとときて掃除
したるは手もさあれる文句しまれ
毒親ある炭句と
云は神前さふとく如かれおの光秘
はよく知てと云を中か炭と景ある
とうのも炭段をかくうけて鑑
入候れとも光秘をよくこうれんか
見えすくして只左の左うらんの跡

いはするせて勝と定べてるかなそつし
き中とゆかゝ木のひゞんあるはや
ほんりし
三十番
左　勝
此の露やいきくび声やこん排々来　山男子
右
蕣衣やとうみの出立排来排子　一女
たの此の露のるすとふ人佗の戸に
示よほゝよいいきくび社種もると
き沖社のあやらさずも沖盛ん
汝りし末社のあふとみこやし
まそもいきくひごとんをかくるけ
らもんれゝとひわくおかくら
れ侍る
衣のをうエ此蕣衣ひとへうるえ
てはるすれ佗衣なれハまみの
上の手かるへしとうく息英琢斎
の排来者と蕣の紀ふの絶ゆへ
とそ

桃翁栩と云ふ而中して煮る佗北逃
蕪径をとく東坡の風情杜子美か
志やも山谷の筆をさつり神く
そ諸逃ニ家とゝ取り稱まれ
山の紀のりし渭水の素代素を見
ひ葛西の浦の月の名毎に東の
雲をあんぐもと探子は語にまずん
て農丈と聖人とをたおさてる
詩の作五十句を流る筆此中て
糸語語の巻の中より出語るをも
つて田舎とハ名付るなるへし仍
以これよ翁の新を撰てり新洞
荘周か夜中を着て帯迷ヵ舟
も宗ふさ作者とくきく大江の千
里八百余の踪を詩の題によれ
近来の其角ハ佗語に語なの人より
也子里日夜中なるを我知れ
志ると云人ハ我これを志る似か
しらぬてこれ筆をとるなきされ
志りさるる

延宝八歳次

庚申仲秋日　嵐亭治助謹序

田舎之句合

第一番

左　持

霧消て両岸をうつ花を把り　孫の手農夫

右

菜摘も白魚をすゞ雨川寂そ　かぶの府人

先の句ハ光琳の一句とみへてゆさ〱しても
ひらしまさ細工の作家とも
やゝそゆかしくみへたる不二のけしき
を見ると云和哥に古人東雪謄
あとく作られて役者きてや右の句菜
摘と云よりも雨川にて白魚を揃ひ
たる一興も此山の雲川の流れも不知
なし

第二番

左　勝

春の水やうろく鯉書よ浮を付見　農夫

右

引のえつ夢とをきの不来の約
出たるをとらし苔の下水さら〱と　野人

不られもる波乃文義之うゑすう
素ふう自叙帖の筆のそうしもるう
右は句論するまさうれ

番三く

左　持

宿の梅振ひのはうきうひし　農

右

来梅よ婦娼ほゝ子文をゑ之　沙
左右の経過ひ白不とそうゆうか
山谷ゝ烟雨ニ青たしカ己ニ黄ン
ヌト他もる梅の行りけ似くう甘
よりしも優うう文梅よつてふか
常よりも影具うりわくとて
又つうりたい商旅虫ハ大和旅思
不ゐや皇てき旅よするう流下も
を指守も文筆をあけうつ

番四く

左

陶房来つきて古里やおもふ　農

右　勝

是乗ス此二家々合見感ゑ八月黒乗　沙人
球泥不論る方子みよ米つき右從
去て不義源うしねよいゆうき往
とも其含於自か声を歌ら且し以
月も文此きと左忌よつえも批事の
批事も忌人きし

番五く

左　持

法利秋人はうしや花奉とすり　農支

右

梅梢の六日見え先志つる人せすよ　沙人
法利をいてふそく花すよたをふる狂人
添切し文自患う京の季のきくう
花やさし上那音中の梅をゐ会
しまる術よ衆の那よゆうるれ
きり西向幽玄義不ふし

番六く

左

隠よりふうし京あるべしよふ雪　農支

右　勝

茶わんにて喜を送るに面白や　雅人

倫子かるに先生はは先生よりてに
ろうを書紀れは後史の事一紙禄り
せんすせ世のよし文さ西書時
称の親に姉様ると書てあるとい
字よませて呉ひ知られはや粉挑
お前りくし且古の句は著に
家て世窮のなへたるに道をせ
んとくのしひ報きをやゆるかる
なしや

第七

左

今日ぶかき浄瑠璃座は先庵　其丈

右　勝

何と支相添諸猫にもし始は離し　雅人

まち範よく云けなれとも支相打を
ろうは輕くは中庵の中を見ひ
て志すのるへきくは直才寺の入を
おの面白とやくんのせう、ふよ
うれさり功以支相識をうちと

定なる

第八

左　勝

請カシく鶯そよや彼ほとく喜ぶ呉竹　其丈

右

時なる家の陣のうちやきうりくれ　雅人

其の庵の歌は其神出る社務お宿
のうそくへ在るくきん所も読り
かきれより喜のひあきお郷くきりく
よおらとく先る心よや陣中くとあり
ばうそ又有りんうされとても請の意
のそるるに呼ゆるを子細に仕付る
所りさよ於可ナランヤ

第九

左　持

理氏喜薩子手をまるふて之　其丈

右

摺鉢の中当麺に出る秋に始め　雅人
理とはる喜は粉菌の梅花を志は
冥靈大椿を論ずるに似たり文招

判の字義ニ秋おもふてかの二葉吹
さま萩の上風とよみ有心もおのつ
からこれハ哀く哀れ深き花実ハ
せなりとしらん

第十番

左

藤の花や浪花こた袖さそふ乱浪　素丈

右　勝

何を言水にほんのりと青田風　此人

藤の花のいさゝかさよふ水ゑひの乖ちふ
けしき凉しく哀はし右の句ハ川
城の辺の田中の夕やそよ稲をと
きけハ感を催ふると定め侍るふ
ゑひも勝へきにハあらねと予ハ
感に寄て勝ん

第十一番

左　お

むらの白ふ花さへ家ぞ練屋之　素丈

右

蚊を火にくれぬ白しゆかしハ　此人

枝に表おけとふかれたる花緑木の
緑まくとよろしく往来しきら
に我又かやりの煙の中ニ朝ゝ只つゝ夕
庭の白く咲て新にうすれし梢の色
ゆうとてもさ又おもしくす待しめ

第十二番

左

石の枕に錯屋ゆりける今此菜花　素丈

右　勝

芝陰の涼しき元え生ひと見てよ　此人

石の枕古歌めく芝木の昼寝の梅葉
もそひとつやのそれ猶もや且芝宥の
三ツせかの其の飲食し所おもし
調しきせすふわかし思ひやる涼し

第十三番

左　勝

袖の香も羽二重寝てあるまじ　素丈

右

菱とろけし骸骨頭る萩の原　此人

羽二重の袖の香ハ其人の心に秋…

秋の露て秋おもふてかの二葉吹
ささ萩の上風とよみ玉ふ心もおのつ
からたゝ思ふき君は宿花実の
もをかとしらん

哥十二

左

藤の花や海老に似て袖をかさ乱浪　素丈

右　勝

何をおもふ小ほんらん看雨間　世人

はしく作れる詩の心をおもひよせられ
くる老や宿かして雑骨の義の意を
かりくてきもみ入きと申する右の
寂滅為楽見侍る

第十四ヽ

左 持

月のさそふ詩の舟も山市も川風　素丈

右

さしく紫の戸泥坊木せらん舟月　此人

公任卿の舟まで来て嘉名よみ
申すしこれは毛山一九川氏の舟
をさを叩ていふ為る事なりとよ
まや宏いはまさ青木の板戸たされ
孫まり成らしよ見る月よ乎れ
くる紫の戸代寺りさし雑お雖
然し

第十五ヽ

左 持

跳ぬ逆る函谷関の鶏る迹　素丈

右

青波糀引付た波戸の凾　此人

函谷関の鶏する此伝の波跳の脈にハ
いはきも猶奇事なし

第十六ヽ

左 勝

分浪者水来て秋の気を持よ　素丈

右

秋の心は波ハ深けれ森光の風　此人

先左の句殊手は波の森光深ま人
らんとむさまのへきや哉句嗣くさ
き事例て大福山金坡るの和尚まで人
て向ふ若干仮中も世左を致する事
あられ一筋を見さうん時ハ許のとく
如君せましと例て右の句閉口

第十七ヽ

左

旅の町書帆る天河を渡めり　素丈

右 勝

芋を植て商をせ和れやうお　此人

左の句里の旅といへんハ古しとて旅の

町と云書ある歟紛しきよしにて
書物ちやとりしハ形似の舟ほ
有ていきら似色ありや又第の紫
小角とやみんハすとある也しくさひ
しき作む慈心矣しこれ聖叡
異ち雨の影まて樺有和月放
芭蕉と化まる等色に似てる古
勝とすべし

第十八番

左 勝

月日乳東風蒲萄ちて春書五 嵩丈

右

纪坊行山志みかんめす秋で 野人
嵐をすすと似悲しくふさる當
の甘露とつけり衣の句ハ狩落ま
ろ句は 菜の味や利休が月まで
よし此山と化まるといきる傍の
似のまふまや能て心をおさん時
ち気の雑とも云ふて傍れと舟
露の一滴まて気すお復ま言

よきなるべし

第十九番

左

時雨遮松私の物干まと出り 嵩丈

右 勝

本のしとあるぬ端生の表世国 野人
和當三箱ま秋露氏露ハわそくら
ひてと云り遮松露もきひしく
端生のさつを見もさひうさ乱
ともかれる菊の上にさへらそえん
時ハ衣いきちやすさうあんや

第二十番

左 持

金龍の出の乳とうある夜の君 のよ

右

筆子露やく秋江し気交おとそく やん
積出のうさくら出の出とうあり
かよの術の鳴声ふ海雁氏家もおと
ろくへしとや夜句見さむる絶て
遠く然てり

番廿一

左 持

佛に於て一燈の光明を照らし 壽丈

右

火燧のくゝりもの氣を燃し 此人

切の一句をつゝる禮子なり

をはじむ藝の楽いさる

佛にや又火燧のくゝ輪の花を

列子曰陽氣壯則夢渉大火燔

焫又藉帶寢則夢蛇云々見を

ぞれを思ふに燈光の夜くらき

に風を起さんやさもあるべし

番廿二

左 持

そとおもしろ猟の揚…… 壽丈

右

雪ふと入のれも蘇鉄の女郎 此人

左のるいおもしき秋に風情なりとも

て侘らはり遠山家のけしきを

見るにまさる猟をく帰てたこの彩

よし此あひ一入人家を見る

のさびしさすずしふ思ひ合せられ

も又ならずのそれの縁情かき

つまらく雪と言との訪しそひ

勝と申し

番廿三

左 勝

詩人ゆるを松江の河豚といへる 壽丈

右

錆よこぼ繧ふこぼ香比較 此人

金澤の河をひさのいふ秋のの露

蕎麦河みをあけて旅松江のかとん

をえより芳に鑑をふくはるに

鑑魚を包して河縁を……

又右の飯あまさぶまにて…

ふとまるひての上志そらく…

あし

番廿四

左 持

謌山家く 稀味噌

不断のぬくみに涼しくは納豆汁　杏ま

右

雲の角々高くて秋　壮人

夏野過し隣家に塩を炊く者

煤はき年代婁の本かし吹御丸て

枯くなる葱の葉まかく野路の花

出て今く乾坤を寄れくる墨

まかる世間話を分ふ有る人し

古の句多く家ふして秋を使

の術余り昔を辛くよく見くれむ

とふ海中とふ人ともに隣家の塩ろ

当前のぬくみなきを前やさんと違

負廿五々

左

町旅の店前の旅日は汁もろもし　杏ま

右　勝

あるて年代家世よつて盤を脱捨つ　壮人

店前の旅日汁を湯と思んて一句ある

しるて手の作は思へすとて見を

驚ぬ実き入し

桐々斎主桃李漫採毫判

鯛の有る本はきくて寝て鯛を

もみちを脱しての事とも見事

の香々と四時合ふ盤の涼し

ひとり其味の深くあきたを

覚ゆす

枝鳳子

桐々齋主桃青漫探毫判

鯛の子ある木のきこえありて鯛もと
まよひちをゆるしてふと以ともに本地
の香くと四時今よりも壁の隠すり
ひとり其味の深くまかせたを
なす

桃青

若葉庵し句合

第一番

左勝

若葉にも八百屋の軒に貴し

右

それられも小松の原は若葉哉

左の若菜ハ八百屋の軒に掛てふかしさ

若菜にも御前ちかく成ハすれ

そこ野の原は又若葉にてたらく

子の日は松を引入さるもあてもなく

作れども先八百屋の若葉のかへろ

きよ心とや持る仍以左為勝

第二番

左

そのやなる手向の木目もあるは

右勝

枝よりも松葉かとのその花

左手向の木目も見ゆるかするゝ

けしきなれど目しれきはれ

書物に心得る一兆中とた

松よりも白ひかりたし

第三番

左持

芹さる西澗は宮んで三ッ茶

右

種をゆるく吹て落る淵く流下

澗深き中て芹とる菊藤ふを

哀もしき先まれ防ゆへく吹て

また能の西名ゆへるも其家へや

左右の汁もあいまりて筆をとか

ゆうしてむかむしゑの作者を

かれハ聲ちきしと生くる翁人

さゝしの枝ニすうり忽花を求

よの芹を何ふるへして汲だる子

うを捨へ〃此我を見はたゝず

かくれ住所先出入年とこ六のこ

まえて所ともぬ

第四番

左持

素かしき絶くはかまぶたる哉

右

胡麻やくるみ孝麩のちぎれより
たれ白あへしき物の数を集さ
そへみし花形は御膳にのせよう
筆の手さひつやしやさしく古
も又ほらきの茶碗茶の弁より
汁出る汁しきも形むへつけ
あしにも白とも手をほめし
くおもへ侍る

第五番

左 勝

まつたけひ麩の瓜木に茶の香

右

苔茶汁染をさかなへんを
平にそへかさ四条の名丈の侍る
しを右り出汁ひ椎茸加して
必要の果てこれを煮ふと花形
ひすりを知やもつもそ化工て
かまう瓜木の丁とをひき山葵
幽谷の古又苔茶染は賞あの品

さる筆以ゆうそとやともたれの
つまさひ感情多し

第六番

左

さつゝ蒟蒻いあるる人をは食さ

右 勝

干大根に兎余菜を添るおとたる金
榎に似しぬさとしとんにやく平れ
とふれは白かれは紅粱豆腐また
されるといそんの且一構の食あの方
より形をかる汁けしきうとおろし
く侍れとも干大根のくわは其に
やせありてゑくて身は一分割を
お体ともは兎余菜の君子を社にあ
はしめ衣と淡切し

第七番

左

蝶のり余味噌の用う小蹈(トウマツ)てなり

右 勝

福清け子手桂あし山の松本に

右

浮草やくれる鶉鳴なされより
なれあるしき秋の影を集き
るへ重し花彩儒の調子取とり
筆の手さひつやしやさしく古
も又ほらきの方谷の奇より
はせる行しきも形をへけ
あしに趣あるも又ほつとし
くおもひ侍る

守三翁

左　勝

ますきひ亀の爪木が斧の音

右

若葉は深きみ不幸あらんを
予前をやかさ田舎の老史の侍る
しとたりますさひ桂宮かしこ
心言の手てられを待ふと花巷
はりを知や老のもえ化工して
かよう爪木の丁ころひくき山更
幽谷の古又若葉は深きあの所

むつて蛍の住おさて小の洞よ飛さまる
聞しむへ丈能あし山のうゑ大木
千とせを経てるもあく此山乃道の
細ろや山彦経ても知りぬ則 兎格
乃し御度莫の野よはさきてる者
ならぬ彼大樗を指さるのためしも出
ひ出られてうと大木又四十八し

第八番

左

柿のもじは秀友よ花と杜氏は老

右 勝

都人山桝を落れ花紫とて
花柿のうちり照お落ていり
上りしの柿の匂ひそうとおつりしれ
とも都人の見なれぬ木同友の
まこの紫ぞ見ろうの人さる風流優
小やさし

第九番

左

夕への雨杜鵑中宿里

右 勝

麦飯やさしう八壽の家称て
九の句あれ夕のさひしさといふ
とて中経見とらひ時を慰む
さらき中貴の花と倍れとも落
の名あらぬ麦飯すり相応し
られ

第十番

左 持

きり麦の切もてざ命名れ

右

夕顔やちと落す志の盛家
お我国のかさうとして美紫
藤の二日ききをゆうそうゆの先
左夢の口あはされ色聖よ信いや
しまとゑとも人そして利松す
あきしまる此法ゆう其上斉命不
食切れてこうるとをおすうい
のちおれ法藤を永よ天道
をゆうして業在をあえ多くの

栴法師の中に紫衣上人とゆかりせん
られ又五儀ニ入て疵を治し候
みそいも荻すもきわ窓なまけ
ある風情まさ露の吉ようすきる
んやと云編志をもくみてやまん

第十一番

左　持

女とや茄子をもくれなすむすめ

右

山賤は垣ねはさけとも見ゆるや

己は紫くれにあかき茄子の
君ならぬと式部が娘はやわ変
れゆりまやいかなる聟と取
いづれの人は見とやあらんなるべし
右の句も又山賤の垣ねにそへる
まさきけ人は来れとも何も
あしとも見えるは古き集露と
のべ下女はよみさるしきなんとし
いづれもよくいづれ程ならん
らん

第十二番

左　勝

五月雨はそれは流のまかく蓑達

右

天気の枝打花さる猫も吹くかな

猫の名に五月雨の古い庭と思ひ
寄せの思ひをなまなかの通船流
れそ荻を筆と渡さむくとよ
めるは心しおかし又斉の愛猫ま
たらひ出よきをよくしたひむ
さる猫を放てたまさる人しる
も猫なしなれとも只通路の猫
に恋ひたるなり

第十三番

左　持

詠へて此筆末はおろくと筆共

右

歎しく惑毛虫がりほされの筆
たれ筆末のおろくし地へ流くて
やさしき句のむかりなりけれの

ふまり水にうふきを死毛虫の義を
ちらんも無理ありて勝ちは
題目をもともあへてみゑてる方
はあん待るへ耳はや出たさき
詞の実ありて勝るすりやすう
こ勝れ

第十四番

左

古きはやりそれも今は夜大根

右 勝

新蕎の夜目誰か真似とふれ
雲を漏る声あり比ありそれも今を
よめる古きは降りしるしぬべ
ありき声もれとも根葉も手望
新一日算と死出る秋の手の緒
む無理あり

第十五番

左

里芋の長なり畠中は花の盛かな

右 勝

莫八山を… 梅添て月然生
里芋真にて実の山の若月
然草見顔生の字用ひんとゆゑ不
へまや但月然石自然木末の新を
くるしみるやしきろそと五文字力
ありて一句をつよく作る事右
勝るへし

第十六番

左 勝

菜作月をみんるよ梅干の新やとに等

右

乳海の作人はや柚べしの責を受ル
丸の五文字出んにもあるを抱すへし
梅干の歌やとれ雖さかの古大根の
食しろ方もひ新るへしや此の
自破戒の作もいまもめて未来柚を
しのせあとうけ焦熱の苦しみは
柚味噌の釜うけかまを経しやともそ
ありく峰菜蕪茶の作ある勝
ふおありく侍れ

第十七番

左 勝

暮山の句松茸ほとすゝしとひとり

右

岩ある水木くらけの耳か出ると

志やれしと深き山の句にぬれて

松茸ほとすゝしくとそろそろけしきを

紫の色に見ゆる味深し右の句も一体

あやまりへかうされとも木くらけの

耳にまかしく出あるかの木下さへ

きこえかねし侍るなり

第十八番

左 勝

色付しを蜜柑と金柑の笑て曰

右

水又菓くを清しといへんとすれハ

枝を蜜柑金柑の論ハ此中に花

みえて此の中に実を多くめり然

の中の秀逸句にあれて花月ら

心ゆかんも役味すへしる後果

の句ハ車さに而て清しと打そるる

やうくらし侍れとも心外の奈

さら此たゝく都する者もみなさも無

右の句を以新ひみ其勝と定ぬ

第十九番

左

瓢か契りハ千瓢のむすひもと哉

右 勝

あれくしなやのへにみな瓜のひとぬ

ひきこるすくの瓢か情千瓢の括ひもと

紀の作あく契りよりそれにまかされ

とも千瓢むくとり前ハ六月の季

に出さるを秋の句に令さんとやの

右ハ又うし枯さくる秋の森にそ

瓜なりけれ括されてひとよりに

打こけくゆしまかきさまきしまる

見んと立新らしく哉かるし

第二十番

左 勝

霧浪の名月中は客座の秋するかれ

右
山さと乃ゑ納豆ふ四そこやゆかし
たの句換え枕もの事くりに是蒙
以を屋をを後ふとうや称ほ以
くるも時雨很の寺院さひしき
中にまされるさうひすてかすひ山
くる豆腐し云の句ハ納豆ふ四
手前山寺の鬼かすことふ寄き
京言を能云のくされハ西句おもて
さしおかぬ
式二十一ゝ
左 勝
木の芽に花や千葉ハ豆をなるてある
右
霰やハ茶子ふ生度ハ埋木
嘉川我端の河出きへ風の君
来ておとするまやり茶度の宗
豆おもへやるきへさうし生度の
埋木花咲へしともおもて只
式二十二ゝ
左 勝
やつしや柏原の光の飯にて宿柏ふに
右
ひけおのや雪にかけの河名さ
ひきつまれみそりくるつく薤の葉
のゑまやるありも前しら種すの句
柏とふ見の白淡みの紀女ニ乃大云さも
新し文来本ふまむもかうれの猪
けしきる雪ハゆしされとも柏原
の寄れのよしへをうかたかふあり鮎
式二十三ゝ
左 勝
鰍とあすの名性えて好ぶ猪
右
氷豆のそしかんてんのかんハ寒けとも
鰍ハ性ヲ註シカンテンハ文字ヲト増
補酙立抄ニ曰ク鰍ハ風味ノ切ス酒
煮以油煎則味愈厚シト云リ此方
賞翫タルヘシ
式二十四ゝ

右

出る気各納豆小皿よこつやゆかし

此句振売杖音のゆくりたる景を

拾ひ出るを前後ふとりや端に味ひ

しかも時雨の波の音たえさひしきま

ゆれさきれるきらひすそおもひ出

しかる意味しく其の句ハ納豆小皿

きわ山寺の客やすらふ程き

余韻を結ぶのくされハ西句おもて

左　持

大根生る近所る家ろしなやくて

右

春の千束男鰍洗ひて立りきる

左の句勝ゆら座の形よいけるる大
根すやおりうらしく雪の中沢田
圓三郎らしあひゝる俳文狂者

賞二十五く

左　持

春の雪今ハ嬉しき波る見かな

右

朧月乃屯糀屋や乗る座るとまふ

晋の孟宗か此方の沢田町ハ為合
さるやとまり右ハ中ゝ擁月乃籍
よ四附か変の香ゝをまひ乍ふる
も亦将たなりとらぬし

諸名達より錦まいらるゝや四百餘
手詞人寸る文讃ぞこひかさると
又り和歌の風流代を示しる玉

里佛法をこま字し形と乃新さ
守ことに寺社の祭くを集め二十
五も萬代句合を勅してまきまをと
ふすること句をなとやうふ化新し
くかんるふ幽形り思ひすま玄高り乞
を冬の風流とさいへんろ且これす
名負て茶の湯座と云ハ时を避
代をおかを之れる茶る人し信託田
沢田町のけしきを知るふきの里の
みの事をかハ麒麟よつけて花を
それ小世風の卯ハ雛まとつ之雪
の中は若菜二月の西風物餅の
楽人喜みをとも渉く花のおもし
これ和わるもとほはなれますを
ひ風あそびきひの原をおもさん
雨ちは春あをとしらきねハ書物
此頃気时をえてかいそろ梁の二
楽よ根草のうと世を祝ふ華
の楽の本お義ふを見しそゝさけの
うつろをくほさえしいそらふ申

さは今まで方此時をこひさゝめ
かゝる風

于時安永八亥中季秋日　毎桃園

猿の条

判者四人
春　煮堂
夏　調和
秋　湖春
冬　桃青

四季之句合

撰者
不卜
才丸
其角

一番
左持　落葉
落つゝむ木葉に流るゝ雫かな　紫水
右
落葉とて高土の峰さに落ちたり　松濤
左の句京の激渓に心をよする文
まで言ひとめたる花二の落め一句の姿
けもゆきうるはしく待るされども句
中自ら見えたる切字なし五文字
にて云切りされば字を加へて
見る人まゝや難しかるべき哉
難しく持にて定めおかる

二番
左勝　扇
秋と言へは秋風をよふ扇かな　渓石
右
秋風に扇をこゝろよく見る　勇招
もれいでぬものはこの手にさへ
何とれかるこのれや秋風をかりて
よみなひしこのうらに候して扇の

子をいたきふさわしき右の句さま
ゆるぎなきは左の句まさりたれ
ともすれば侍らんかし

三番

左 持　秋興

秋萩の月夜のうさ秋の暮　一舟

右

我も程は待ちてそも哉　文静

ひとりの句数も深く文殊人の秋
寂しさのしきさま何の右の句もすぐ
うさ深く又気色もふくみよろし
侍れどもそれよりもいまさ
し仍以持トス

四番

左 勝　柏堂

松苗も枯野の月に鳴鶉　和風

右

大橋を枯野の上に千入月　金篠

左の句は枯の中に松苗の
そよしとも見る風情より
めに見つたきものとす松染の千々哉
ふくみて一句たけ高し右も又枯野の
作意尺穏なれど猶これよりも猶松のすさや
目立侍らん

五番

左 持　細代

子を抱て秋は何かと寂しさよ　心水

右

何の木のゆるぎやみぬる秋の暮　不角

おしろいのまさる作意めづ
らしやさし右又何しろの秋のお
にもちて寂しさやすゝみけしき
左右感心するきうし

六番

左 勝　石菜

破れ傘の作の薮出る露の秋　調林

右

浅き露や涼しさすゝむ夕の月　立政

左の句はちとこのふまへくゝろすを
見おこさせるとふけんぞの論き

かりはせられておもしく侍りしより
持しきものゝ句になりときこえし
仍而左為勝

七番

左勝　鴨

旅鴨の春のかりそめ行留哉　嵐雪

右

鴨くさき葉を手に提て塩屋から　魚児

右くかすの哥ハより立る事句かきり
あし一句安しこのゑして露宮の
けしき画てりかの妹の何か
ぶと見えしハ六月廿四日の月を定
と出けんさるをにや左の句も
東を鋼りのかき取尽むため
もゆそれよ侍れども旅の句なれ
すき句の寺る調みのしやいまん

八番

左　水鶏

風よ来て水鶏たゝきさる桃か　一排

右勝

門閉て留守をしるか水鶏かな　珍碩

水鶏たゝきさる桃木のあけしきほそく
かゝみて春のゆふべ穴へ松嵐の絶く
みて住の夜ハ水鶏が門を守さる
留守の気色情よまさりてきこえ
見え侍る

九番

左持　何かし

何かしが淡雪かの何か家　李下

右

春深く野ある飛こむ何か也　仲民

烈風家盛吹えの森見ゑの中まく
見るりかくそれもまも何か乳波から
此春さむし世よ古ハ又野する何か
生しよおとろきてかえ施るけら派か
かの剣刀ある文吟嘆か耳をそえて
雑書か目のさね をそつせといひて
左右の是非論すると何かし

十番

左勝　非示

浮雲や火と暁清き京ゆやうな人　玄来

右

浮雲を縦にして猶雲の来ぬ　孤屋

たゝの白き雲を雜て取く来さる
も見へては
左ハ浮雲と永浮雲を変るべき事ハ
京の大雅なる事を見たりと勝
さるべし

十一番

左 勝　頭巾

山里や頭巾とる人ま人も恥し　訳羽

右

頭巾きぬ出家も見へて笑ふ哉　桑子

めでたき流れぬ山中の雲をこゝろすまや
る揃林も頭巾るこゝ目にたて雅
すこ発句の清ら人ことへに於
も目を見ても頭巾人を中さる
為し

十二番

左　煤掃

何方ふ行て仏そも煤をはらひ　挙白

右 勝

煤とりて寺はめでたき仏かれ　不卜

すゝ花の日は捨ひ紙を絶さらむ使
ふして艶し古へるの煤掃と思ひ
よりける先旅かまや面白清勢
殊ことをさし京えば感んるをか
るく仏れとも目でたき仏かとも
しるのちきをひ我すさうて見え
待れは尚猪

一物我不卜のめしは分と老境
ま志さひを事りて志るさかる
山の宗祇をさりなからし
我の花たり発を思ひ湖をさ乃
羽も讃題をさそへて風雅の奴
と云るてと季るときより出る集
はしそすてと云て合ひまおさるを
然とも甚秋まで去りぬの後
とらて東籬の菊も色を空

さゆゑ本朝の牡丹も此書人をこ
とよれ梅のはひさしく此無於
れにこれ時ゝ白く六色も文人とも
ろしむ為花に名けき林に亭
むの其の清きうつるところ紀楽
を指ひて左右に手をもて猿て
罪てゑを富士なりにひく
象もそくまさらに中しや楽
ふえにとての角をぬきむに
似たりといえんされとも春後の
月をぬひ鶴鶴の情をたえさらん
ことゆゑれ負東卯のとし筆を
江上の游にそときて経に芭蕉
雪秋の蛙火に對す

秋情残

月は春をさかりに鶴の蹄ぞむかし　其角
元秋の月も衣やうさしかて長
実に幽玄なるけしきを鶴の法
ゆふのけていひつく祢作く祝と
宗ふよひらく流ふすしふよ
紫蘭おほし

みさくれてきよすきの桐の実　文鱗

貞徳老人云服に四季ありと云
れ待ちとも尚時なくなりて
京寺を云そへてゐるをいふし
とれ梧桐春くる芸のも森
の中にはい花さる寄の梢り
秋さるけしきを然るやうま
して桐の寄とのは桐の木と
いえんも同しるゑしえ秋く
梢は冬めきて木かくしのち
中しなれとも得のうにかすまし
秋自白ひかてうかしく九を
作る仏本なへし梧桐の実と

あくみくすれしと云まて坂添の
物と知ざるゝ味ひを云更らり
穂おしとかきしとてゝよう京の
物おほひつる事へと深く待る愁
思給る心すて白きの色をも之
数味深のいろ

山添乳をのむ猿の声也し　口称
穂八里水屋浜浦また新しよ
み侍るも峡程更科より野れ
と山数々も渡侍る店を山乳
までゆらひさる白き乳暮
猿と云まで女と云字を添し
らひさるゝかすの都るゝ味有る
もよく通しいう

いのちを甲斐の旅ともいふよ　桜蘭
猿の声出しきより山川の流れ
しく冷しき仲を敬実しゐる
自猿も山鼓をゆしるひさるゝ
法の云家剥皎を埋み着ん　梧蘭
旅の危く物すきすまきを見て

身の安き常を知しくもと甲
斐ともいふは古人俳諧の古格より
深く自然に学ぶものまじはり
さるゝ剥皎を埋む童犯を新
しく哀をこそ侍る

それらしの紀を守る竹の戸　芳竹
花にも家しき花追甚侍とさも
みえ宋師法し

此月より来るやゆるむ此の片　李下
花の句後世の作ととらぬそ
む友孫を拝してかく乳往人の
いふ見しき花人をを自くにのそ
へ孫の侍し其の句毎よる他の和
うるほしきる眼を留て

橋の小雨をあゆる物出ず　仙化
其の京ぞ季のつりゐ也
都く安しみなしざる家をえ
了慥我の職目にとふ安く
ところく侍るものと

二 猿を好む案山子の旅しく　朱泣

是又其のけしき之付拾さき
ろくすみし時也田畑にせるの
稲さうへ破れたる案山子に立
たる姿はあれなる事しも
見へたるなり秋の夕気て其
すら稲たるにけす雲のうちを
たる作も感情ある也へし
去门うに碑て蝶をとる事 筆白
白地の上にあるを真して知らる有
あり蝶を取るかしは殊と
無しうる作諸に面白し
度やうの稲のうつる紗やけ金里
此句附ありし骨を和する句
和り其句の蝶を現ちすしる
句にはくは蝶を取なとふを
風物にして付たる之度やは
禁京の下官のものは蝶とる
事とふに風流なる楼雅に
おまひあり 秋すのし歌り
無くも度やらの歌のて賦る

さま珍しる也まく見る
あり
瓦うる眉をかくすきぬし 前
初湖とふうきぬし老え
るし瓦うる眉とふは採すし
て去けるに作し俳諧換辞
に風に度やる国さんるにあらず
或る故此句の風情あらんか
けし咲て情に見んやる細きや 根風
瓦さる眉とふに先もうる人の
おきへて味の家あとれひその
に仕うる作しけしき也あり
まのよして土つのこの総れは
すれも夜に取知して句をかき
手作る是木の句まて柿梅子
花の浮しうひ和句にふ前は
るへし
紫ちの風には矢篦きるよこ斎
矢篦切とふと紫光秋し
其句民家にして武士の若者

ともに珍しき物の付なりとて
付ける句也大形は物体なとゝ
の体を顕はしたる句也或は中
将なる人の哀みにて不埒に入
浮舟やうき附けたるなとの類
ならんされとも其なるけれと
よまれしは是餘情の事なり
付るを気味とやいふへきこの
かゝる話とて下手は付けの中に　狐罠芭蕉
薮のけのまさきにいりしとみえて
付る志のも句作風情をやめよ
付くるにすへてのなかにいひ捨て
る句侯心を付へし
例へは月夜のくまなかりし　文鉾
みの秋の浅深に体をそこの人
付る傘に露路虫と集を
声も見さえしとゆへんゆるを
おもしろし狐罠と云には
うまく付るはなるへし
石の下種類てる場にさみて　挙白

霞は空と霧と云よりおし　露沾
しくゆるものなりよりて独
と云不思ひをさる昔は在原の
出し中に穂に浪合の浦十市の里
菅野の里玉川なと隣に詠る
に便て付るなるも亦那須の源氏
まに不二月に更科と付るを
当時は句の新宗にまかせ名所を
云ひよするもの [illegible] なるへし
是れ二代の刀をつ誂　治李下
此句は浪中の景物と独る是ぞ人
しいひ付へて俳諧の宗なと許る
に使るなり石の戸樋なと云
に誹諧を物事く云ひよする
誹事し浄き他情に水なとなえ
らひ名剣を求へきとあまひよう
一句無情なのしん二代と云ふて
野形骨の誹諧の名人と云ふなり
永禄は金と申しく　松の風 仙化
永禄は千羽代をいそんあきし誹諧

の名人なほくハ発句あるものゝ法
ていの一句を定しとい事おかしからう
もゆる事をやすく作る気なすく心を
付く玩味すへし

近江の田植も浅よ剃しむ　珠雀
古代の作を今に残しと云ふ者
どこか句に書ハ抽毎等映すして
余情もなしきもの人しる作人
作る処も浅近江ハちくの末ありまく
田植なとの風情も遠からす国を
ハ遠くへし

夜起て火をちらせんほとゝぎす　其角
時なるを主合せる句と美濃遠
江と一所を云ふて時なるを待
そひ家とする心持して火をちら
させんとく起てと句作せる

舟よ菜の花の浦伝を鉾して　其角
時なる水を浮浦なとにある
句猶も船中よて菜の花を
しるる風流奇特と思ひ侍り

山吹よて菜の花を也すハ浮きの
句もよくされハ実よりも事物を思ふ
まかひよをそる又桃林の逸遠

旅中にて人の娘を名つけく　李下
此句趣向句作自ら珍し具足
きりと船中にて風流人の娘なと定
菜の花とさせる作意よ遊
感味すへし　松浦の作ある念を
ひなハ飛鳥井の君をも望みて恋
すえにおのつから旅中人のよそほ
ひに優りて風情ある句なし

弥勒の市まても花ふし　松風
此句むかし句は作者もちとの
意をよく思ひ作る句とたんし
を理陰る時を見て一句によし
く付作る遊句不労

待るひの後ハ随ふる月の市也　蕉翁
弥勒の市とい時ハ観音開き御遊
常人とも云ふ事よ象謡開帳きも
大に物淋しき所を思ひまで

綿の袖に落てむくへ此中に埋れ
能臥たるつゝ人へる作えぬ絶
きゝうる文字まて一句の味を許さ
ず應解にて能味ひ味ふへし

友よみ嬉の物すきの哥　仙化

友呼嬉んは聊しく待る此むら
の作物濃きさまを寄句に云ふ
しまぬ家よくうけうる寒さ春
とこふそれや使為に感を得くる
ひくう

雨さへぞいやしかれる鶉の聲　口舟

嬉の春とこふより田舎の作業
の人うる皆と付くる中鶉しう
なとゝ其も鶉鳥鶉し志うも秋
に云調に何ゝは古きよりよみ
侍る更して句とれし古寄かる
ゝの鋼あし有とゝもよひく
名句をすつかるも何ゝは侍
れいさのとをしく不化

門は魚干候陰の寺　挙白

都の作何かりて漢ちるかとの門前
に魚干鋼かとおこけてきて侍多
し卑中に干と鋪うるまて
作者の感帯おひまへし

理不蕃に物く武者宗六七讃　芳き

此句かれ遊て海邊の軍にて札を
る作之民在寺中に押上さ粮
藉して乱世のさまよとに
新のえへし安の中れおこやうに
安楽の忘ええ情のへし句ひ
合せさく句と見えへし

河う跡の松帯なえて　甘南

おの句の勢をよく謂つくる程
る取よねる武士の作なれも
志らしこ句のとられ句の強
甲ゆう句の新しこを能く
賜よとむへし

能の一剰ク日も月に何し寂之文
たんし踏猿きひしく讃じ流
に能こ新し侍るかゆくれ変

続の地に落てむくしれ中に切れ
読聞ゆる人へる作者る地
をしる為文字まて一句の味を付さ
日夜解き凡能味ひ付たへし
友なみ懐の物うきの音　仙化
友呼千鳥しく行る神むら
の作物淋きみこと中に我句に工夫
しまる哀なるけふりとき
と云てそやの夜寒に感を付しく
ひとり
雨に人そいやしうけれる　影　黒口斎
候の

切字の心得へきるゝとなりきはし
ある時の一句とし嘱の上に見られ
通りの栄の所に入日の影をうつ
し見てとゞめ月をさへ染めて
一句を仕立てる也嘱を存ずるに
用ふるハうつし付けれ其挑戦ハ筆
子の作をもよろしきハかり見ゆ
付れハ写しまても当句を発す
句の取情を相手に先んずる也
気の餘歴戯ぞ事にあり　李下
海下の気をむせり白之月夕暮
みよし地をひそのりて見め
稲妻の末句を花ぬきろえを　峯白
もろしぬを譲るに述わるし気
ゆゑんれそすらし森の末句面倒
ある末句に稲妻おもしる漉
秋の取の花ともいゝべし
清見とあるき聖跡に落をね　松風
此句の付振一句又素逸之物凄き闇
の取の稲妻ひかりとする時分

聖跡に師とる俳を流行しく
俳諧の中ふ之花ゆふとて中う
付らん
人ゆかしく筆とる物をとる者ゆ　揚水
此句文素逸之取にの句のうる
ゝる取を大悔中の取に見ひ附し
あうえ歌之未にハ跡に師とひさる
に世に住む人ハ筆ふ物をかうきえ
こふ俳を流滑おして末句の忘我
碧る雲形に残すべし
酒もち人呼む金山の酒　篠江
金山ハ名の高き末句を
よくうけて仕よ及す付やう
明らか之
右芭蕉翁の経之当時の俳諧
の意味述ゐらし新くハ句を
翁し給んやと傳うれハ只兵
より華し来た翁日の席翁移
座陸し流る十韻ふして学を
たちます

短大
第6562號
受入
昭36.3.14